

留学生作家廉想渉の初期文壇活動と女性主義：「除夜」を中心に

金 榮敏

伊藤知子訳

I. はじめに

廉想渉の初期散文を精読すると、女性問題に対する関心が非常に大きかったことが分かる。廉想渉が初期散文の全般にわたり表現した最大の関心は女性問題であり、彼が初期散文を通して提案した究極的な人生の目標は自由の獲得と解放の実現であった。自我の覚醒と個性の発見および実現という命題は、結局は女性問題に対する関心から出発し、その答えを探る過程で提案されたものである。廉想渉が多様な散文を通して朝鮮女性の生き方に持続的に関心を表した理由は、彼が設定した自由と解放という生き方の目標と関連が深いといえる。朝鮮女性こそ自由と解放が最も必要な人々であったためである。劣悪な労働環境と労働者の貧しい生き方に対する関心もまた、これに通じる。廉想渉は朝鮮に散在した女性問題を解決する道が単に女性自身の覚醒のみにあるのではなく、覚醒が可能な社会的条件の確立にあるという事実を強調した。労働問題に対する解決の道もまた同じである。そのような点で廉想渉には朝鮮の女性問題と朝鮮の労働問題は、別箇の事案ではなく一つにまとめられるものであった。

ところで廉想渉が散文では女性の自我覚醒と自由な生き方に対する志向を主張していたのとは異なり、小説では家父長的で女性に対する嫌悪感をみせているといった解釈もまた少なくない。同じく廉想渉の作品のなかで新女性の生き方を扱ったいくつかの作品に対して論者により評価が交錯するが、そのように評価が交錯する代表的な作品の一つが「除夜」（『開闢』、1922.2-6）である。この論文は廉想渉の初期文学を正しく理解するためには、作品「除夜」に対する正しい理解が必要であるという思いから出発した。

II. 研究史と問題提起

廉想渉研究の先陣をきった金鍾均の「除夜」に対する評価は、好意的ではない。金鍾均は「除夜」の女主人公ヨンインが「倫理道徳観の革新と社会の信任を得ること全てに失敗した新女性」の典型と整理し、「除夜」はその誤算のどん底で彷徨する女性らを啓発し導くために書かれた作品と解釈した。「除夜」がもつ価値を積極的に認めた最初の研究者は金允植である。廉想渉が「万歳前」を通して初めて一人前の作家になったと言われるが、「万歳前」に至る道に「除夜」があることを無視してはならないというのが金允植の見解である。しかし金允植が「除夜」の価値を積極的に認めているにも関わらず、金鍾均と同じ主張をしている点は、この

作品に廉想渉のいわゆる女性嫌悪症が反映されていると見る点である。李甫永は「除夜」がもつ価値を最も積極的に認め、高く評価した研究者だ。「除夜」が韓国フェミニズム文学の古典として残るであろうと述べている。

既存の論議を念頭におき、まずはじめに検討すべき問題は、「除夜」の創作動機と関連したものである。そのなかで比較文学的関心事である外来的要因の問題は、研究者が共通して提議している点であり、具体的に点検してみる必要がある。これに関連して、「除夜」がモデル小説なのか、もしそうであればそのモデルをどのように想定したのかという問題も付随的ではあるが検討する必要がある。つづいて解決すべき問題は「除夜」の創作意図がどこにあるのかを究明することである。「除夜」が新女性に対する批判と女性を啓発し導くことを目的として書かれたという見解は、廉想渉作品に現れるいわゆる家父長的態度と女性嫌悪主義の根源が「除夜」にあるという主張と通じている。しかしこのような主張は、「除夜」こそフェミニズム文学の古典として残るであろうという見解とは大きく相反する。そのほかにも「除夜」が自然主義に反する作品なのか、否かという互いに異なる意見、また、「廉想渉」の初期散文と「除夜」の関係をどのように想定したのかという問題ももちろん重要である。

Ⅲ. 「除夜」と脚本「人形の家」

「除夜」の創作動機については大部分の研究者は、外国文学作品との関連性を挙げている。金允植は「除夜」に直接影響を与えた作品として、日本の近代作家有島武郎の「石にひしがれた雑草」に注目した。李甫永はドストエフスキーが作り出した人物カラマーゾフと、イプセンの戯曲「人形の家」の影響について指摘したことがある。「除夜」には‘ノラ’という人物に対する言及が二回なされている。李甫永はこの点に着眼し「除夜」と「人形の家」の関連性について述べている。徐宗澤は「除夜」がゾラの作品「ナナ」を思い出させるという見解を提示したことがある。

「除夜」は「人形の家」という作品の一、二節のみを引用しただけではない。これから証明していくが、「除夜」は「人形の家」の基本的な話の展開構図を借用した作品である。「除夜」は、創作意図と叙事構造などで「人形の家」から直接影響を受けた。それならば廉想渉はどのようなきっかけでイプセンの戯曲「人形の家」を読み、その結果「除夜」という作品を構想するに至ったのか。廉想渉が初めて「人形の家」に接したのはいつ頃なのか分からないが、¹ 彼

* この発表文は本発表者が近年発表、または発表予定の以下の三篇の論文を土台として作成したものである。本発表文は紙面の制約上、脚注を大幅に省略した。引用の場合以下の論文を参考にしていきたい。

金栄敏、「廉想渉初期散文研究」、『大東文化研究』第85集, 2014. 461-497頁.

金栄敏、「廉想渉初期文学の再認識：「除夜」研究」、『サイ』第16号, 2014. 155-188頁.

が特に関心をもち、この作品を読んだのは「除夜」を書いた年である1921年と推測される。² 1921年1月25日から4月3日まで『毎日申報』にはイブセンの戯曲「人形の家」が‘脚本’という表記とともに「人形の家」という題目で連載された。翌年の1922年、「人形の家」が二種類の単行本として出版された点から考えてみると³ 当時この作品に対する関心は少なくなかったと思われる。『毎日申報』連載本の「人形の家」は梁白華と朴桂岡による翻訳として発表された。『毎日申報』はイブセンのこの作品が‘婦人問題の聖書’と呼ばれる作品であると紹介している。しかしこの広告の文案には、元々『毎日申報』が作品の翻訳を企画したのではなく、『新女子』社の依頼を受け梁白華と朴桂岡が作品を翻訳したという事実が明記されている。『新女子』は1920年3月、金一葉により女性啓蒙運動を目標として創刊された雑誌である。

『毎日申報』連載の脚本「人形の家」について廉想渉が特別な関心を見せたことと推測する根拠は、まず「人形の家」の挿絵を羅蕙錫が描いたという点である。連載脚本「人形の家」の最終回には、イブセン原本の戯曲にはない歌が一曲載せられている。この歌の歌詞を作詞したのが羅蕙錫であったという点も注目する必要がある。羅蕙錫は「人形の家」を校閲して出版した単行本『ノラ』にも「ノラ」という詩を収録しているのだが、この詩は前の連載本に載せられたものとは歌詞が大きく異なる。

廉想渉が日本に留学していた頃、つまり1910年代半ば以降、主に滞在していたのは京都を含む関西地域であった。東京と一定の距離を置いて暮らしていた廉想渉に原稿を依頼し、留学生文壇に呼びこんだ人物が羅蕙錫であった。廉想渉は羅蕙錫が編集に関与していた留学生雑誌『女子界』第二号に散文を発表し文筆生活を始めた。既存の研究では廉想渉と羅蕙錫の交流は始まった時期を廉想渉が慶応大学に進学した1918年春ごろと推測している。⁴ しかし二人の間の交流は、これよりもはるかに前の時期であったと考えられる。廉想渉と羅蕙錫の交流は、羅蕙錫の兄羅景錫⁵を媒介として始まった可能性が大きい。交流が始まった時期は、羅蕙錫が東

金栄敏, 「観念の啓蒙主義-李光洙初期小説研究」, 発表紙未定.

¹ 参考までに、日本では1910年代にすでに6巻の翻訳書が刊行されるほど「人形の家」に対する関心が高かった。したがって廉想渉が日本在留中すでにこの作品に接していた可能性もなくはない。「人形の家」の翻訳状況については김재석, 「1920年代「人形の家」翻訳についての研究」, 『韓国劇芸術研究』第36集, 2012, 12頁参照.

² 「除夜」は1922年発表された作品であるが、廉想渉がこの作品を執筆し始めたのは1921年である。

³ 1920年代国内ではイブセンの「人形の家」が三度翻訳された。一度目が『毎日申報』連載本「人形の家」。二度目はこの連載本を修正し刊行した単行本『ノラ』(永昌書館, 1922)。三度目は이상우の訳で刊行された『人形の家』(漢城図書, 1922)。板本の比較に関する詳細は김재석, 前掲書, 13頁参照.

⁴ “廉想渉が東京留学時代に羅蕙錫と交遊していたというのは周知の事実だが、その時期はだいたい廉想渉が慶応大学に進学した1918年春ごろと推測される。”(金慶洙, 「1次留学時期 廉想渉文学研究」, 『語文研究』第38巻2号, 2010, 297頁.)

⁵ 羅景錫の年譜については羅景錫, 『公民文集』, 정우사, 1980, 260 - 263頁参照.

京に到着して私立女子美術学校に入学した時期である1913年頃と思われる。そう考えられる理由の一つは私立女子美術学校の学籍簿に記載された羅蕙錫の住所が当時の東京、麻布中学に通っていた廉想渉の住所と一致するためである。⁶ 羅蕙錫の留学が兄である羅景錫の斡旋を通じてなされた点を考慮すると、羅景錫が自分の妹が滞在する住所地にすでに居住していた韓国人留学生廉想渉の存在を知らなかった可能性はない。廉想渉と羅蕙錫そして羅景錫の間の交流は彼らがそれぞれ留学を終え帰国した後も続いた。

羅景錫・羅蕙錫兄妹と交流を持続していた廉想渉が、羅蕙錫の挿絵がついた『毎日申報』の連載物「人形の家」に特別な関心を持ったであろうという推測はそれほど無理なものではない。廉想渉は一時的に羅蕙錫を慕っていたことも知られている。廉想渉はイブセンの「人形の家」を読むにとどまらず、更に一步踏み出して、これを活用し作品を構想する段階にまで至った。そのようにして誕生した作品が「除夜」である。「人形の家」を土台とし、羅蕙錫は挿絵を描き一篇の詩を書いたのであり、これを土台として廉想渉は一篇の小説を構想したのである。

「除夜」には、「人形の家」の具体的なあらすじを念頭に置き、使用された文章が二つ出てくる。一つ目の文章は“「ノラ」は夫を生かして奇跡を望んだが、私（チョンイン）は夫である人の要求を満足させ奇跡が起こるように祈っています。”⁷である。二つ目の文章は“ノラの借用證書をストーブで焼いた後のヘルマーの喜びでした。”⁸である。この二つの文章は「除夜」で非常に重要な意味を持っている。しかしこの文章の意味を知るには、あらかじめ「人形の家」のあらすじを知っている必要がある。しかしながら「除夜」にはこれらの文章の意味するところについて全く説明がない。これは読者が「人形の家」のあらすじを知っているという前提で廉想渉が「除夜」を書いているとも解釈できる部分である。そのような前提が無理だとしても廉想渉が「除夜」を書きながら「人形の家」の存在を常に念頭に置いていたという事実だけは明らかである。「除夜」のチョンインが夫Aの前夫人の家出について言及し、彼女がこれ以上‘貴君の懐に安息を求める美しい鳩’ではないと言うのも⁹、「人形の家」のノラ自身がこれ以上夫の‘雲雀’ではないという事実を悟る場面を思い出させる。

「人形の家」と「除夜」の話の展開構造は同一である。「人形の家」と「除夜」はいずれもクリスマス为背景として生じた出来事を扱った作品である。「除夜」ではクリスマスをむかえ夫が

⁶ 二人の学籍簿の原本は波田野節子著, 최주한 訳, 『日本留学生作家研究』, 소명출판, 2011, 589頁および 616 - 617頁参照.

⁷ 廉想渉, 「除夜」第3回, 『開闢』, 1922. 4, 47頁.

⁸ 廉想渉, 「除夜」第5回, 『開闢』, 1922. 6, 46頁.

⁹ 廉想渉, 「除夜」第1回, 『開闢』, 1922. 2, 41頁参照. 傍点も原文そのまま.

女主人公であるチョンインに手紙を送るところから話が始まる。「人形の家」もクリスマス週間に配達された手紙が破局に向かう重要な媒介物として作用する。「人形の家」のノラと「除夜」のチョンインは、いずれも夫に隠している過去の秘密がある女主人公たちである。ノラの秘密は、彼女が夫の看病のためお金を借りるのに父の署名を偽造したことであり、チョンインの秘密は、彼女が夫と結婚する前に妊娠をしたということである。ノラとチョンインの過去は全く異なる性質のもののように見えるが、ノラとチョンインはともに‘不道德な女’という点では差がない。家父長的権威を重視するノラの夫ヘルメルは‘早々と人生を台無しにした大抵の人々はその母がうそつき’だったという偏見を持っており、うそつきは母にも妻にもなれないという発言をしている。二作品の女主人公は、夫が自分らの過去を許してくれる‘奇跡’を期待する。‘奇跡’という単語は「人形の家」でも「除夜」でも繰り返し使用される重要な語彙である。「人間の家」のノラと「除夜」のチョンインの過去は、夫の社会的地位とそれにとまなう威信の墜落を甘受しなければならないことである。彼女らは自身の過去を夫が包み込み、苦痛を共に分かち合ってくれることを期待する。しかしそのような‘奇跡’は起きないのである。結局彼女らは過去があからさまになるや夫に非難を受け、心理的苦痛に苦しめられる。ところが二作品のストーリーは結末で急展開をみせる。夫らのいきなりの‘許し’宣言がみられるのである。しかし、夫の許しに対しノラの反応は家出、チョンインの反応は自殺として表われる。二作品の女主人公が夫の許しを渴望するが、結局はその許しを拒否し、自分の道を選択することになるのである。

既存の研究では‘モデルの無い作品を書けない廉想涉の創作方法’を挙げて、廉想涉が一時期慕っていた羅蕙錫が「除夜」の女主人公の実際のモデルであったのではという意見も提示している。この作品が羅蕙錫をモデルとした作品であるという見解には同意しがたい。

IV. 「除夜」の創作意図

廉想涉の初期三部作のうち、今まで最も注目されている作品は「標本室の青蛙」である。「標本室の青蛙」が注目された理由は、この作品が廉想涉のいわゆる処女作でありながら知識人の精神的苦悩を深く表した点などにある。「標本室の青蛙」を発表した頃の廉想涉は、すでに評論家としての位置を築いていた状態であった。したがって彼が『開闢』に小説を発表したというのは、その事実だけでも世間の関心を引く出来事であった。廉想涉と批評理論を交わした金東仁さえも彼の小説家登壇に対して嬉しい気持ちを隠さなかった。しかし廉想涉自身は「標本室の青蛙」に対し、処女作としての意味をそれほど大きく付け加えなかった。¹⁰「標本室の青蛙」

¹⁰ 廉想涉,「処女作回顧談を再び書くまで」,『朝鮮文壇』,1925. 3.(『廉想涉文章全集』第1巻,348 - 349頁参照.)

がいわゆる廉想渉の処女作であり且つ出世作という評判にも関わらず、廉想渉は初期三部作を集め自身の初短編集『견우화(牽牛花)』を出し、その順序を「除夜」、「暗夜」、「標本室の青蛙」とした。

「除夜」は、「標本室の青蛙」と「暗夜」に比べ、初めて対象とする世界を客観化させて扱いはじめた作品であると評価される。「除夜」についての最も積極的な評価は、この作品が「万歳前」に進む道筋に置かれている作品であるというものであった。しかし「除夜」を単純に「万歳前」のための架け橋としてのみ理解したならば、それは廉想渉作品の深さを正しく理解できない。「万歳前」が廉想渉小説の新しい境地を開いた作品であるとすれば、「除夜」は廉想渉の初期文学を集大成し完結させた作品である。廉想渉は「婦人の覚醒が男より緊急な訳」を発表以降、「髪の改造と生活の改造」(『女子詩論』, 1920. 1)、「女子短髪問題とそれに関連して-女子界に与ふ」(『新生活』, 1922. 8)などいくつかの散文を通じて女性の自我実現とその実現可能な社会的条件を作る必要性を主張している。登壇初期に風俗改良と価値観の改造を繰り返し主張した廉想渉が「除夜」という作品を執筆したのはある意味当然の結果だったと言える。

『牽牛花』の序文には「除夜」についての廉想渉の言及が記されている。「除夜」について廉想渉は、この作品が“自殺により自己の浄化と純一と甦生を得ようとする解放的若い女性の心的経路を告白したもの”¹¹であると言及している。ところで注目したいのは、この言及に先立ち廉想渉が『牽牛花』という作品集の表題が‘夜叉の心を持った菩薩’を意味するという点を明らかにしている点である。「標本室の青蛙」と「暗夜」、そして「除夜」という初期三部作にはいずれも自己矛盾と自己分裂に悩める人物が登場する。そのうち夜叉と菩薩の心を持った人間という性格の規定に最もあてはまる人物は、当然「除夜」のチェヨンインである。誰の子かも知らない子供を妊娠したまま父の強要に勝てず夫と婚礼を執り行わなければならないヨンインの人生は夜叉のような暗黒に取り囲まれた人生である。彼女は自殺を通して浄化と純一と甦生を得るのだが、廉想渉は死を目前にしたヨンインの姿に菩薩の姿を投影させようと意図していたように思われる。夜叉と菩薩が共存する生についての廉想渉の認識は、「除夜」の結末でヨンインの自殺行為を‘二つの生命を救う’行為と叙述している。そのようにみると「除夜」の結末に出てくるヨンインの自殺の場面は、過去に対する懲罰や人を啓発して導くことや単純な破滅を意味するのではなく、それ以上の深い意味を含んでいるといえる。夜叉と菩薩についての認識は、多少難解にも見える「除夜」の結末を理解するためには非常に役に立つ。この作品の創作意図が決して‘墮落した’新女性ヨンインに対する懲罰にあるのではないということを見せてくれているのである。

¹¹ 廉想渉,「自序」,『牽牛花』,博文書館,1924.(『廉想渉文章全集』第1巻,277頁.)

「除夜」の創作意図がどこにあるのかを理解するためには、この作品の冒頭と巻末についての理解が必須である。「除夜」の冒頭と巻末はそれぞれ次の通りである。(引用省略) この二つの引用文はそれぞれ作品の最初と最後に出てくる文である。ところでこの二つの文はそのまま続けて読んでもまったくおかしくない。その理由は、この二つの文がチョンインの死を念頭に置いた叙述であるためである。死は絶対的な終結であり、その後にくるのは空のみである。しかし死は単にむなしなものではない。そこに永遠の安住と絶対的解脱、純粹さと神聖、至善が存在するためだ。チョンインが小説の最後の場面で死を目の前にして‘私は生きてます。永遠に生きてます。貴君の胸に抱かれ、永遠に生きてます’と言えたのは死の意味についての最初の文の叙述があったからである。死はチョンインが受け入れなければならない運命であるが、その意味が懲罰ではないことはここからも確認できる。

「除夜」の女主人公チョンインに対する廉想涉の態度は決して嫌悪的なものとは言い難い。チョンインのいわゆる失敗した生を通して新女性を啓発し導こうといった主張もまた同意し難い。それよりはむしろ、一人の女性に強制された結婚という家族制度が彼女をどのように苦しめ、どのように家族と別れさせたのかを描いたとみるのが正しい。

現実主義者だった廉想涉には「除夜」で他の結末を選択する余地はほとんどなかった。廉想涉は「除夜」で女主人公チョンインの話の扱いながら、この作品が非現実的な話として読まれる可能性について強く警戒した。「除夜」のチョンインは恋人Eとドイツに逃亡する計画を実現するため、釜山行きを選択する時、自分の行為が‘活動写真や通俗小説を実演するようだ’わびしくもあり、笑いがこみあげてくるようでもあった。ここで自身の行為が通俗小説として読まれてはならないという自意識は、主人公チョンインのものではなく、作家廉想涉のものであった。廉想涉はチョンインが恋人Eとドイツに逃避することも、彼女が夫の‘許し’を受け、幸せな人生を送ることも実際の現実では不可能なことだと判断していたように思われる。

「標本室の青蛙」で多少萌芽を見せた廉想涉の自然主義的態度が「除夜」で消滅しているのか、それとも拡散しているのかという問題もまたこの作品の結末を通して明らかとなる。先に引用したチョンインの遺書は実質的には“두 生命은 求하야짓습니다.”(二つの生命は救われました)¹² という文章で結んでいる。この文章は彼女が死を通して、呪われた幼い生命の生涯を救い、また夫の名誉を守れたという事実を意味する。ところで注目すべきはこの後の“..... 貞義를, 崔哥의 피에서, 求하야주시옵소서.”(貞義を崔哥の血からお救いくださいませ)¹³ という短い文が付け加えられている点である。‘貞義’はチョンインの妹である。チョンインは、

¹² 廉想涉, 「除夜」第5回, 『開闢』, 1922. 6. 47頁.

¹³ 廉想涉, 「除夜」第5回, 『開闢』, 1922. 6. 47頁.

死を目の前にして妹が自分と同じ道を歩まないことを望んでいる。この文からわかることは、廉想渉がチョンインの生の経路に影響を与えた要素として‘崔家の血’すなわち遺伝的要因を重要視しているということだ。チョンインは夫に自分を‘妾が二人いる父’と‘破倫的、性的密行にたいして怪しい興味と習性をもつ母’との間に生まれた娘であるという事実を忘れてはいけなと発言する。¹⁴ ‘母は私を孕んで情夫から逃げてきたが……’¹⁵という文や、‘そのおかげで私の行動は幼いころから一毫の監督と指導もなく、全くの自由(?)を手に入れました’¹⁶という文も注目する必要がある。妹の未来を心配している「除夜」の結句は、廉想渉が遺伝と環境を重視する立場でこの作品を構想し展開していったことが読み取れる。この最後の文だけでも「除夜」に反映された廉想渉の自然主義的性向の深さを察することができる。このように見てくると、チョンインがなぜ自分の死を‘生命を救う責任’を実現する行為として叙述したのかも明らかになる。自身の死により‘崔家の血’が伝わることを防げると信じているためである。さらに見落としてはならない点は、『開闢』連載本には無い文章が、単行本『牽牛花』の中の「除夜」に追加されているという事実である。単行本の中の「除夜」はこのように結んでいる。“이것이 마즈막 부탁입니다.”(これは最後のお願いです。)¹⁷廉想渉は『開闢』連載本の「除夜」を校閲し、単行本として出版する際‘これが最後のお願い’という新しい文を追加し、妹の貞義を崔家の血から救うことがチョンインの切実な願いであるという事実を繰り返して強調しているのである。

V. 「除夜」と初期散文の関連性

「除夜」と対をなす廉想渉の散文のうち一つを選ぶとすると、それは「至上善のために」である。「除夜」が廉想渉の初期小説世界の代表とするならば、「至上善のために」は彼の初期散文世界を代表するものである。「至上善のために」は、「除夜」と同じく「人形の家」を始めから終わりまで念頭において執筆した作品である。この作品の冒頭は「人形の家」でノラが夫のそばを離れると宣言する場面の直接引用から始まっている。廉想渉はノラの宣言が‘多くの女性のための気炎万丈であり、全人類に対する警告’だという見解を表わしている。続けて廉想渉は‘増していく靈魂の生命は反逆にあり、全ての旧に対し反旗を翻し‘新’に向かって邁進’すべきことを主張する。「至上善のために」で反旗を翻さなければならない過去を象徴するのは、今日の家族制度である。彼は“機械化した道德の〈清鏽〉によって飾りたてた伝統の上に形成

¹⁴ 廉想渉, 「除夜」第5回, 『開闢』 1922. 2, 46頁参照.

¹⁵ 廉想渉, 「除夜」第5回, 『開闢』, 1922. 6, 42頁参照.

¹⁶ 廉想渉, 「除夜」第1回, 『開闢』 1922. 2, 47頁参照. 符号も原文そのままです.

¹⁷ 廉想渉, 「除夜」, 『牽牛花』, 博文書館, 1924, 103頁.

された観念の私生児、専制主義の残骸、これがまさに今日の家族制度ではないのか”¹⁸ と叱咤したのち、家族制度がこれ以上時代の流れに逆行することは不可能だと断言する。廉想渉は続けて次のような言葉で家族制度を批判している。(引用省略) 伝統的家族制度の問題点を指摘し、家父長的権限の乱用を批判したのは、廉想渉が初めてではない。しかし今日の家庭の姿を奴隷的屈従、屠戸的妥協、偽善的義理、監禁、叱咤、罵詈、誤認、怨嗟など数多くの否定的修飾語を動員して‘最悪の巢屈’と断定するのはあまり見られない。脚本「人形の家」と小説「除夜」、散文「至上善のために」は互いに干渉したテキストである。「人形の家」と「除夜」のあらすじを念頭に置いて「至上善のために」を読むと、この文の真意が把握できる。「至上善のために」は廉想渉の散文のうち、最も大きな注目を浴びた「個性と芸術」(『開闢』, 1922. 4.)にこめられた主張を持続的に発展させた文である。「個性と芸術」で主張していた人間の‘自我実現と個性の表現’という命題は「至上善のために」でさらに具体化される。廉想渉は自我の完成もしくは実現を阻害する最も大きな障害を、父または家長の権威によりかかる現社会の家族制度として設定している。「至上善のために」の最後の文は“ノラのように妥協するな。これが至上善のための、自我実現のための第一箴言である。”¹⁹だ。廉想渉はこのように「人形の家」のノラに妥協しないことを勧告することで、彼女の家出を支持する自身の立場を隠さずに表している。これは李光洙が「ノラや」を通じてノラに家庭に戻ることを促していたことと、明らかに区別される態度である。²⁰だとすると彼は「除夜」のチョンインのために何ができるのか。作家廉想渉は女主人公チョンインの最後の選択である死という行為を説明するのに‘真純’と‘神聖’と‘至善’という表現を用いた。死を目前にしたチョンインが自身を弁護するのに使えるようにこの時期廉想渉が非常に大切にしていた単語を与えたのである。‘神聖’は羅蕙錫が詩「人形の家」でノラの家出を擁護するために選んだ単語でもあった。

VI. おわりに

¹⁸ 廉想渉,「至上善のために」,『新生活』,1922. 7.(『廉想渉文章全集』第1巻,209頁.)

¹⁹ 前掲書,224頁.

²⁰ そうかと思えば、李光洙の言及には‘個性の解放’についての誤解を指摘した文がある。これを通して李光洙と廉想渉が異なる点はどこにあるか具体的に確認できるので興味深い。“だからノラや、もう一度夫のもとに帰りなさい。そして新しい意味でおとなしくてかわいい妻に、母になりなさい…(中略)…ノラの声に呼び出された妹らはいま甚だ思想が惑乱している様子だ。彼女らはともすると男女の差別を忘れ、男子と同化することだけが個性の解放を完成するかのように誤解し、その天職である家庭の治理(統治)と夫、子に対する愛の生活を捨て、工場と会社と選挙場に通うことを目的にしているようです。さらに今、目をこすり起きようとしている我が家の姉妹がこのような誤った思想に染まってしまうのを見ていると、哀れで不憫です。”(李光洙,「ノラや」,梁白華訳,『ノラ』,永昌書館,1922.)

廉想渉の女性認識または、女性主義に対する態度が散文と小説で違いがあるという指摘は正しくない。彼が散文では女性の自我覚醒と実現、そして個性を具現することのできる自由な生に対する志向を主張したが、小説では一貫して家父長的で女性に対する嫌悪の態度を見せたという解釈は間違いである。廉想渉の初期散文に現れた最大の関心事のうちの 하나가女性問題あり、「除夜」はこの問題に対し、本格的に接近した廉想渉の最初の小説である。初期散文の最大関心事を作品化したという点だけでも、「除夜」を慎重に扱わなければならないという理由は十分である。「除夜」が過小評価される理由は、この作品をいわゆる墮落した新女性の生を啓発し導いていこうとするために書かれた作品と理解しようとするところにある。このような偏見は、「除夜」がもつ重みとそこにこめられた作家廉想渉の思考の深さを正しく理解し難くしている。彼が初期に関心を持っていた自然主義的文学観もやはりこの作品に非常に深く反映されている。²¹ 『開闢』連載本にはない最後の一文が単行本に新しく追加されていた点も注目しなければならない。

「除夜」の結末は、逆説的に廉想渉の人間に対する愛情と生の多面性について深みのある省察をみせる場面として解釈されなければならない。廉想渉は夜叉のような人生を生きてきた人間にも菩薩の心が隠れていることを、作品の結末で見せようとしていた。チョンインが夜叉のようなもしくは彼女の表現を借りれば「地獄のような人生」を生きだした直接的原因は婚前妊娠という事件である。地獄のような人生に対する責任が彼女に無いわけではない。しかし「除夜」で廉想渉はそれよりももっと大きな責任、さらに根本的な原因が愛情もなく強要された婚姻制度にあることを繰り返し強調している。

「除夜」で廉想渉は女主人公チョンインの人生を決して一方的に非難していない。廉想渉はいわゆる社会的通念を先立たせた非難の声を伝えるたび、チョンインに弁明の機会を与えていた。「除夜」は、チョンインが死を目前に夫に書いて送った書簡文の形式をとっている。廉想渉が「除夜」で選択した書簡体形式は、作家と登場人物間に客観的距離を維持しながらも、世間の非難に対し、女主人公チョンインが自身を自ら弁護するのに最も効果的な叙述形式であった。廉想渉の文学世界で「除夜」が占める位相は、単に「万歳前」につなぐ過渡期的小説とみるだけでは十分ではない。それよりも初期散文の最大関心事を作品化し、初期三部作に投影した人生観を集約し表現した作品としての読者の価値に注目する必要があるのである。*

²¹ ただチョンインの人生を理解するために自然主義的視覚を導入したのが果たして効果的だったのかという問題は、これからの課題として残る。女性主義と自然主義の結合についての非効率性の問題が提議されるのである。